

ママがとある秘密ルートで購入した特殊香水 それをつけると息子の俺と・・・・・・・・

ママは毎日忙しく働くビジネスウーマンだ。

OLなんて言葉は少し古いのかな。

ジェンダーの隔たりがなくなって女性も働くのが当たり前になっているから。

台所で薄いピンクのエプロンをしながらママは、休憩にちょこんと振り向き額の汗を拭った。

「はぁ・・・炊事も大変ね」

俺の方を見ている。

俺はファイティングポーズで答える。

「じゃあ俺はトイレを掃除してくるよ！！」

明日もママは仕事。俺は学校へと通う。

黄色いランドセルがリビングの片隅に放り投げてある。

ちょっと雑で無造作な俺の性格。

自室は二階の奥。

毎晩そこで俺はパンダのぬいぐるみと一緒に寝ているんだ  
けど最近それじゃ寂しくて・・・。

もちろんスマホのSNSでは夜中にみんなとグループでや  
りとりしているし、将来の目標に向けて勉強にも励んでいる  
が、

・・・・・・・・・・どこか孤独だった・・・・・・・・・・。

夜9時。

テレビに飽きて俺はぼんやりと周囲を見回す。

ママは何しているんだっけ。

ママがいないことに気づいた俺。

家族はいろいろ事情があって他にはいない。

俺とママは二人暮らしだ。

少し悲しい別れもあったりして・・・・・・・・

ママはシャワーを浴びているようだった。

俺は忍び足で洗面所の方へ向かった。

忍び足の理由は自分でも分からなかった。

脱衣所と洗面所が一緒の場所にある。

その奥がシャワールーム。

白い小さな引き戸がある。

その前に俺は少しおしっこをして・・・・。

戻り、脱衣所の扉を開けた。

湯気がシャワールームの引き戸の隙間から少し漏れている。

俺はぼんやりと思い出した。

「アダルトビデオ・・・・・・・・」

あんな風に大人って夜を営むんだね。

子供の頃には決して知らなかった、知りようもなかった事実。

男女がおちんちんをぶったてて・・・女の人の穴に挿入する。

女の人の肉の穴ってすごいんだね。

あんな衝撃的なことってこの世にないだろうって思った。

モザイクが掛けられていたけれど。

この国では倫理みたいなことで・・・法律倫理なんかはよく分からないのだけれどモザイクが必須になっているみたいだ。

あれ以来、俺の頭の中にはなんだかよくわからないエッチな妄想が定期的に襲ってきていた。

だからではないと思うのだけれど。。。。。

俺はママのいる部屋の引き戸をそっと開いたんだ。

ママのいる部屋。それは先ほど述べたようにシャワールームだ。

(体験版は以上になります。ご読了ありがとうございました)